

熊本県文化財調査報告 第69集

神水遺跡

— 県立図書館建設に伴う文化財調査 —

1984

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告

第69集

くわ みず
神水遺跡

— 県立図書館建設に伴う文化財調査 —

1984

熊本県教育委員会

序 文

熊本県では図書館を移転新築することになりました。県教育委員会では移転予定地が、「神水遺跡」の一部であるため、事前に発掘調査の計画を進め、昭和57年度に現地の発掘調査を実施しました。本報告は、その調査記録であります。

この報告書が、文化財愛護のため広く活用されることを願うとともに報告書発刊にあたり、地元熊本市教育委員会をはじめ、発掘調査に協力された方々に対して深く感謝します。

昭和59年3月

熊本県教育長 外 村 次 郎

例　　言

1. この報告書は、熊本県立図書館建設に伴って調査を実施した熊本市神水遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、熊本県立図書館の依頼を受け、県教育委員会文化課が実施した。
3. 現地での調査は、県文化課参事緒方勉が担当し、文化課臨時職員安達武敏らが協力した。
4. 現地での調査に際し、実測、測量、写真撮影の作業は緒方、安達及び島津陽子があたった。
5. この報告書の作成には緒方があたり、整理には県文化財収蔵庫の皆さんの協力を得た。
6. 本報告書の執筆・編集は諸方が担当した。

本 文 目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 調査に至るまで.....	1
2. 調査の組織.....	1
3. 遺跡の位置と環境.....	5
第Ⅱ章 調査の経過	6
第Ⅲ章 調 査	13
1. 試 挖 (第3図)	13
2. 道路状遺構の調査 (第7図).....	16
(1) 道路状遺構 (第7図)	16
(2) 出土遺物 (第8図).....	18
(3) 道路状遺構について	18
3. 協和醸酵跡地の試掘	20
(1) 調査地点の選定と各グリッドの発掘 (第9図)	20
(2) 第1・第2試掘地点 (第11図)	25
第Ⅳ章 神水遺跡調査のまとめ.....	29

挿 図 目 次

第1図 神水遺跡と周辺主要遺跡	2
第2図 神水遺跡周辺図	3
第3図 県立図書館建設地トレンチ設定図	9
第4図 北トレンチ北側土層断面図	10
第5図 中央トレンチ北側土層断面図	11
第6図 東トレンチ東側土層断面図	12
第7図 道路状遺構	15
第8図 図書館建設地出土遺物	17
第9図 協和醸酵跡地グリッド配置図	21
第10図 協和醸酵跡地試掘 (上 1グリッド 下 3グリッド)	23
第11図 協和醸酵跡地試掘 (上 5グリッド 下左 第1試掘地点 下右 第2試掘地点)	24
第12図 1グリッド出土遺物 (1~14弥生土器 27石包丁 15~26縄文土器)	26
第13図 3グリッド出土遺物 (1 土師器 3~7 弥生土器 24・25石器 2 須恵器 8~23縄文土器)	27
第14図 5グリッド及び第1試掘地点出土遺物 (上 5グリッド 1 土師器 2~10弥生土器 11縄文土器 下 第1試掘地点 12・13布目瓦)	28

図 版 目 次

図版1 図書館建設予定地の景観1	33
図版2 図書館建設予定地の景観2	35
図版3 図書館建設予定地の試掘	37
図版4 道路状遺構1	39
図版5 道路状遺構2	41
図版6 協和醸酵跡地試掘1	43
図版7 協和醸酵跡地試掘2	45
図版8 協和醸酵跡地試掘3	47

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至るまで

県文化課は昭和56年に至り、県立図書館より次のような連絡を受けた。それによると、図書館では昭和60年度完成を目指して熊本市出水二丁目へ移転新設するということである。そこで文化課として、移転先になっている出水二丁目の建設予定地（江津ガーデンボール跡）が「神水遺跡」の一部で、工事に際して事前の調査が必要であることを通知した。それらの接渉の後、調査に必要な経費を計上してもらうことになった。

昭和57年8月26日に至り、「県立図書館建設地埋蔵文化財発掘調査」の経費について令達を受ける。その後58年1月12日になり、図書館及び土木部職員と現地での打合せ、事業計画等について改めて説明を受ける。

当日の説明によると、まだ最終的な建物等の設計は出来ていないが、およその建物の出来る範囲を示してもらうことができた。

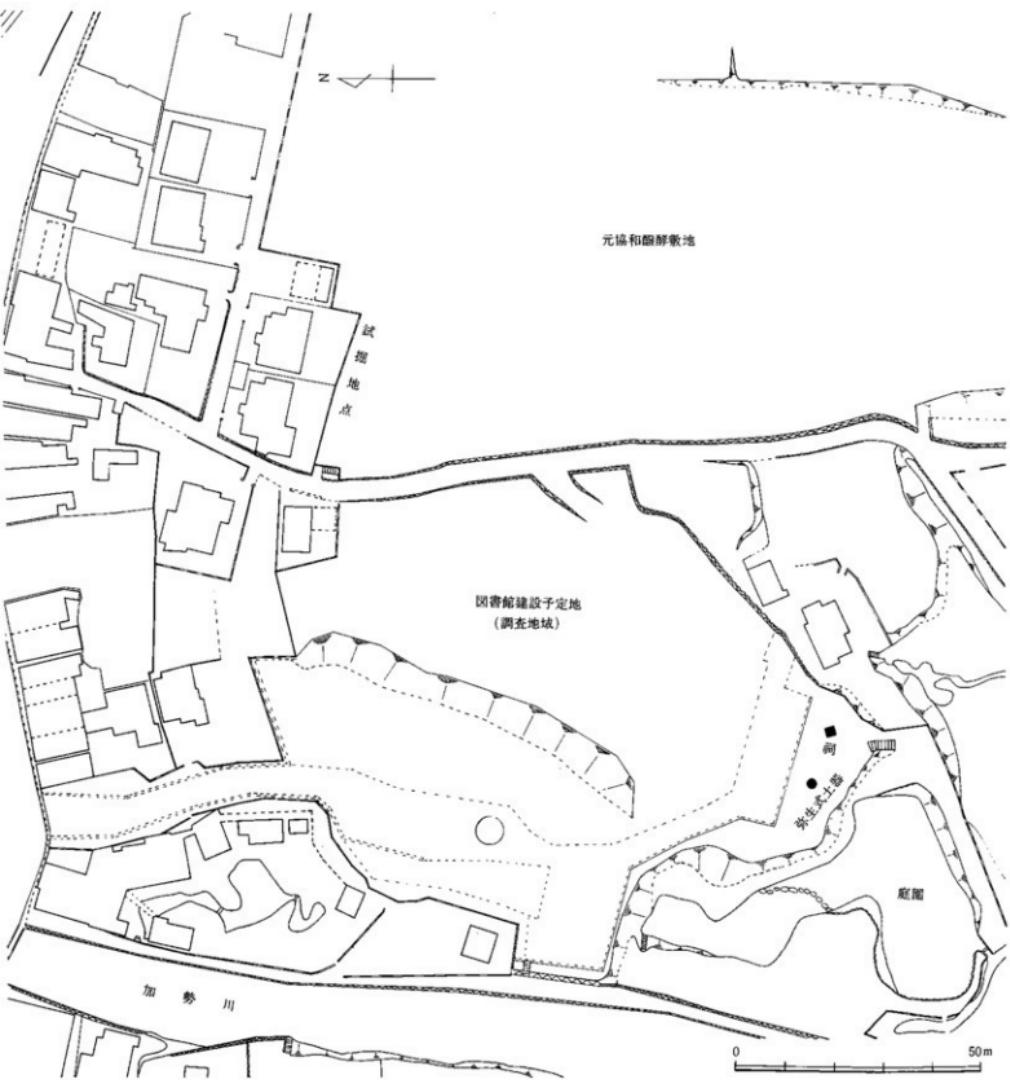
以上の様な経過の後、1月20日には調査資材搬入、引き続き発掘調査をすることになった。

2. 調査の組織

調査責任者	前文化課長	岩崎 辰喜
	文化課長	米村 嘉人
	文化課長補佐	林田 茂一
	主幹(文化財係長)	隈 昭志
調査事務担当者	文化課主幹 (經理係長)	大塚 正信
	前文化課参事	松崎 厚生
	文化課参事	花田 隆二
	文化課参事	横尾 泰弘
	文化課主事	谷 喜美子
	文化課技師	西沢 八朗
	図書館庶務係長	西岡 義弘
現場担当主査	文化課参事	緒方 勉
	臨時職員	安達 武敏
調査協力者	熊本市教育委員会	



第1図 神水遺跡と周辺主要遺跡



第2図 神水遺跡周辺図

3. 遺跡の位置と環境(第1・2図)

熊本県立図書館の建設予定地は、行政区画のうえから熊本市出水2丁目153番地で、これを国土地理院発行の五万分之一図幅「熊本」に求めれば、北より11.3m、東より2.4mのあたりに相当する。

現地は名勝水前寺成趣園に源を発する加勢川の左岸に位置し、敷地の一部は水流に接している。敷地の後背部は託麻原で、東に行くほど標高が高くなっている。加勢川の水面が標高約4mに、調査地の江津ボール跡地が、下段で7.7mに、上段で9.8mに前後である。また道路を挟んだ東側の協和醸酢跡地ではおよそ11m余りである。

図書館建設予定地は、戦前料亭「画図花壇」があったことは人の知るところで、戦後は被災の後レジャー産業としての「江津ボーリング場」に姿を変え、若者達の人気を集めていた。またこの地は、古くは加藤清正の臣大木氏の居宅であった。その後、肥後藩主細川家の別家細川内膳が此処に居宅を構えていたことになっている。このことは、現地に残る庭園に栄華の面影をみることが出来る。また庭の東北にある小祠は、細川家にゆかりの名刀希首座にかかわりの社といわれている。

なお、神水遺跡について述べれば、県立商業高校前の道路敷では弥生時代の甕棺が、また砂取小学校西側でも多数甕棺が地下げ採土の際発見されている。また協和醸酢跡地では工場敷地内と、正門北側から同様の甕棺が出土している。

第Ⅱ章 調査の経過

熊本市出水2丁目153番地の江津ボーリング場跡地を利用して県立図書館が建設されることになり、数次の打合せの後現地入りすることになった。以下調査の経過について、調査時の日記等から抄出することにする。

昭和57年1月20日 木 くもり小雪 調査資材を現地に運搬、いよいよ明日より発掘調査に入ることになった。

1月21日 金 くもり小雪 折しも大寒、前以て準備していた通りバックフォーを搬入、現地図書館建設予定地を試掘することになった。北トレンチ、中央トレンチの順序で発掘を進め、ついで東トレンチ、南トレンチと全域をカバーするかたちで手順通りに発掘をした。

1月24日 月 くもり時々晴 南トレンチ断面に土色から遺物包含層とみられる層序を見出したので、試みにこの周辺の上土をはいでみることにした。それと同時に、調査地域の地形図の測量をはじめる。また敷地内の庭園脇に小祠がある。小祠の南側に気象観測のため設備がされ、設置のため表土が掘返されていた。ここに多数の弥生式土器が散乱しており、ここが弥生時代の遺跡であることを示していた。

1月27日 木 快晴 各トレンチの土層断面を削り、断面図の実測を継続する。各トレンチでは度重なる土木工事により、コンクリート或はその廃棄物が埋没していて遺物包含層の検出は不可能に近かった。かろうじて、東トレンチの南端に溝状の断面が検出され（後に道路上遺構とする）、後刻この地域の調査することになる。

1月31日 月 快晴 トレンチの実測も、北から中央に移る。一方南トレンチ西側の拡大区について平面的に遂次掘下げていったが、そこに期待される程の成果は得られなかった。本日11時、県立図書館事務担当、県建築課及び文化課職員が現地で打合せ、調査の状況や今後の見通し等について双方で意見を交換する。

2月7日 月 快晴 本日改めてバックフォーを搬入、東トレンチ南端で検出された溝状遺構の延長を確かめるため、西側一帯の表土をはぐことにした。盛土の厚さが深いため数日はかかるものと思われる。

2月8日 火 くもり 前日よりの表土はぎは幅8~10m、長さ10数mにわたって掘り上げた。ともかく埋土の層が深いため、二段・三段と排土を順送りした。

なお、南トレンチ西側の拡大した部分については、斑点混りの土層、黒色土、はては粘土などが島状にあらわれ遺構検出を思わせた。しかし慎重発掘の結果、それぞれが擾乱土であることが判った。一つの事例として、地山とみられた粘土層も浮いていて、新しく掘上げられてる

ことが知れた。そこでこの地域の発掘は、これ以上調査の必要ないものとみて中断した。

2月14日 月 快晴 計画によれば図書館建設予定地の東側、道路を挟んだ上段の協和醸酵跡の敷地が館への進入路になる。そこで、前以てこの地点での試掘も併行して進めることにした。

協和醸酵跡敷地での試掘は、専ら手掘りにより発掘をすることにした。まづ進入路が予定されている北側に、東西方向に 4×4 mのグリッドを設定、南より1, 2, 3……7とした。発掘は各奇数番号を掘り、各グリッド共原則的に遺物包含層の確認で止め、第Ⅳ層以下の発掘はしなかった。

2月15日 火 くもり後晴 協和醸酵跡側は1, 3グリッドを第Ⅱ層まで発掘したところで黒色土があらわれる。一方溝状遺構には床面とみられる硬化面が出てきて、道路遺構の可能性も期待されるに至った。

2月21日 月 晴 溝状遺構（道路状遺構）の南側に小さい溝様のものが検出され、ついでそれが側溝である可能性がでてくる。

2月24日 木 くもり 一方上段の協和醸酵跡敷地での試掘は、次第に発掘深度を深めた。5グリッドでは家屋の土台や基礎栗石があらわれ、遺構そのものの検出を難かしくしていたが、概して遺跡の保存状態は良い。出土遺物として、これまでに各グリッドから青磁、弥生式土器片が発見されている。



道路状遺構調査風景

2月28日 月 晴 道路状遺構では実測、ついて硬化面を撤去してその解明を急ぐ、その結果、硬化面は二枚あり、その下には挙大の自然礫が出てきた。また協和醸酵跡側は1・3・5の各グリッドは発掘深度も地表45cmに達した。引き続き7グリッドの表土はぎにかかる。

3月3日 木 晴 前日は雨のため道路状遺構は全面にわたって水没、ここでの作業は困難なため協和醸酵跡側の作業を取りかかる。ここでは実測、遺物取上げ等の作業したが、本日新たに1・3グリッドから縄文土器が出はじめた。

3月4日 金 くもり後晴 協和醸酵跡敷地では引き続きこれまでの作業を継続する中、門との間の二箇所を撰んで 2×2 m範囲を試掘することにした。西からそれぞれ第1・第2試掘地点とした。

3月7日 月 晴 道路状遺構の調査を再開、硬化面の追跡したところ布目瓦多数が発見された。

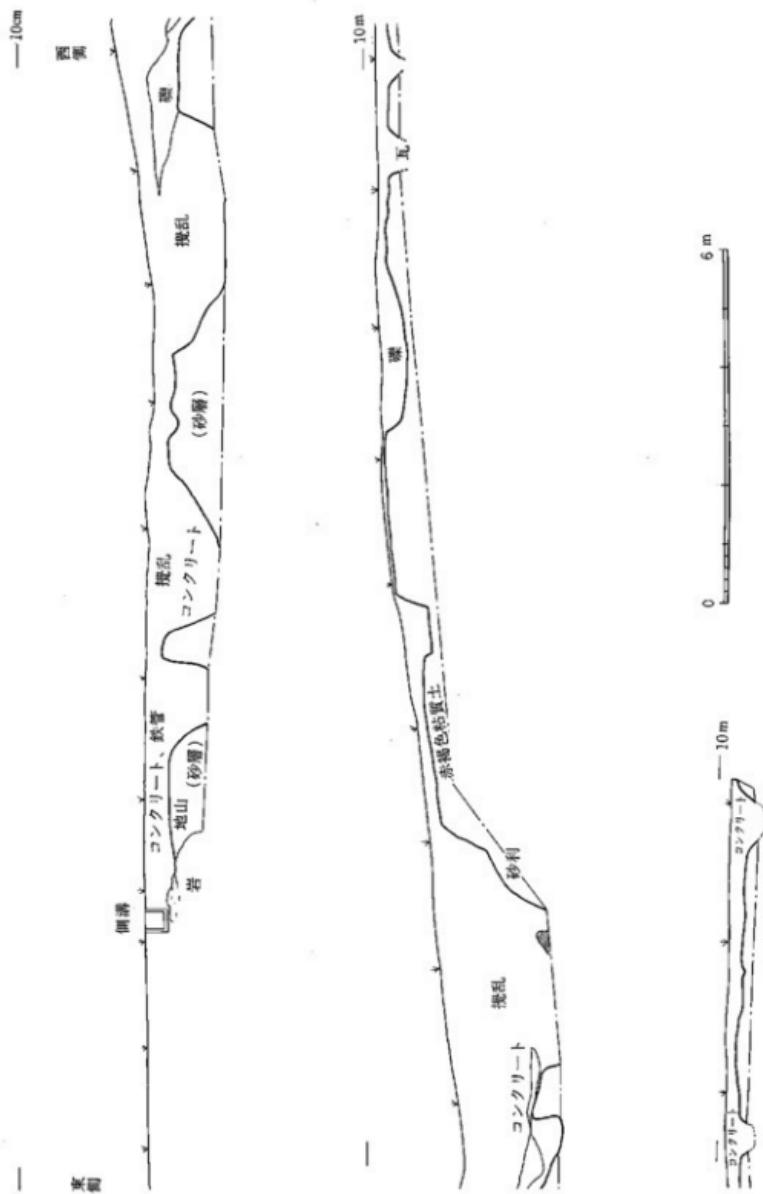
3月10日 木 くもり 3グリッドで方形プランをもつと思われる遺構の一角が数日前よりあらわれ、ついで5グリッドではいづれも径6~7cmはあるとみられる円形の遺構のプランがあらわれた。4×4mのグリッドではその全容がつかみきれないが、その様子からそれぞれ住居址のプランを想定することが出来る。また第1試掘地点では黒土層上面に布目瓦等が検出され、遺物分布がこの一帯に及ぶことを示していた。

3月14日 月 晴 道路状遺構の断面実測、ここでは硬化面下の礫は土層断面カットの結果自然礫であることが解る。一方、実測を完了した各グリッドでは、遺跡の保全のため埋戻しをする。

3月18日 金 くもり 発掘調査終了の後、数日をかけて現場で遺物の仕分け、簡単な整理をする。協和醸酵跡側での試掘では弥生式土器、土師器、布目瓦等の破片及び縄文土器があった。縄文土器は、その多くが曾根式土器とみられる。



第3図 県立図書館建設地トレンチ設定図

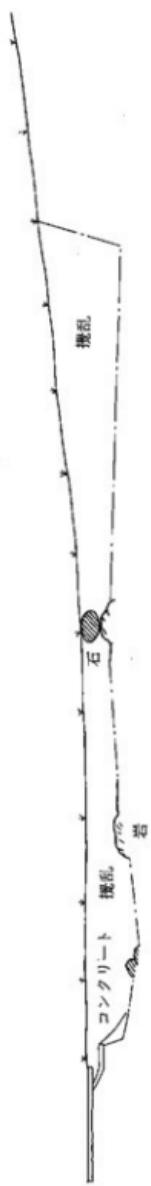


第4図 北トレンチ北側土層断面図

東側

西側

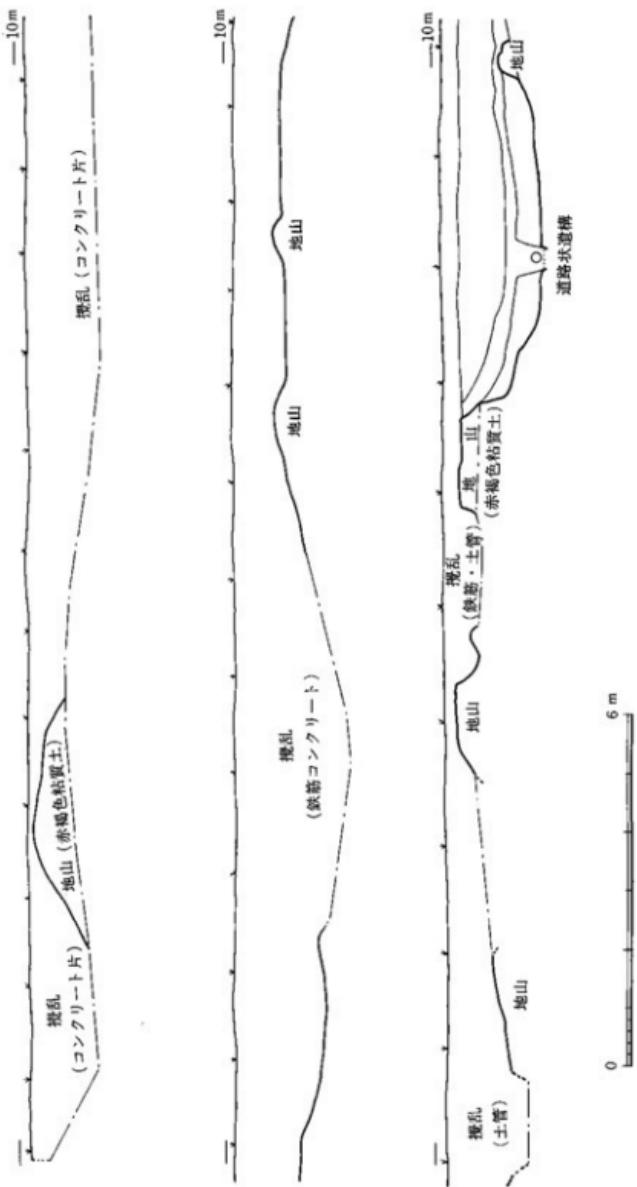
— 10m —



— 6 m —



第5図 中央トレンチ北側土層断面図



第6図 東トレーンチ東側土層断面図

第Ⅲ章 調査

1. 試掘(第3図)

図書館建設予定地が熊本市内市街化区域であることもあって、これまで土木工事により数次にわたり土層の擾乱されていることが予想された。そこで細かい手作業による発掘作業を実施する前に、遺跡のひろがり、遺物の分布の状態を把握し、調査の重点区域をしづらため予め試掘を行なった。試掘にはバックフォーを搬入し、北・中央・南と東西方向に三条、そして南北方向に一条の東トレンチを設定した。以下各トレンチの状況を説明したい。

北トレンチ(第4図) 北トレンチは、調査予定地の北側の地点を東西方向に約46mにわたりて発掘を試みた。ユンボーの幅約90m、土層の変化の状況を見ながら発掘深度をかえたが、発掘は機械力をしても埋没物やコンクリート廃棄物があつて、困難する程であった。

北トレンチ西端の地表は標高7.8m、東端では9.8mでこの間2mの比高差がある。土層断面をみる限りほぼ全域にわたって擾乱土が入り、その深さも中央より西側が深く、1m以上にわたり中にはコンクリートや砂礫等廃棄物が埋められていた。この様に最上層は擾乱土であつて、ついで遺物の包含層を期待はしたが、そこにはすぐ様地山が続いていた。地山は場所により構成する土層が異なり、西側では粒の揃った砂層からなり、中央より東側では赤褐色粘質土、砂利等であった。西端付近の砂層は深く、加勢川に隣接することもある、その成因(氾濫原か)についても我々の興味をひいた。

中央トレンチ(第5図) 北トレンチの南約25mのところに、これと平行して長さ約49m、(中央部の一部未掘)の中央トレンチを設定した。地形の状況は北トレンチとほぼ同様で、東が高く比高差約2mである。

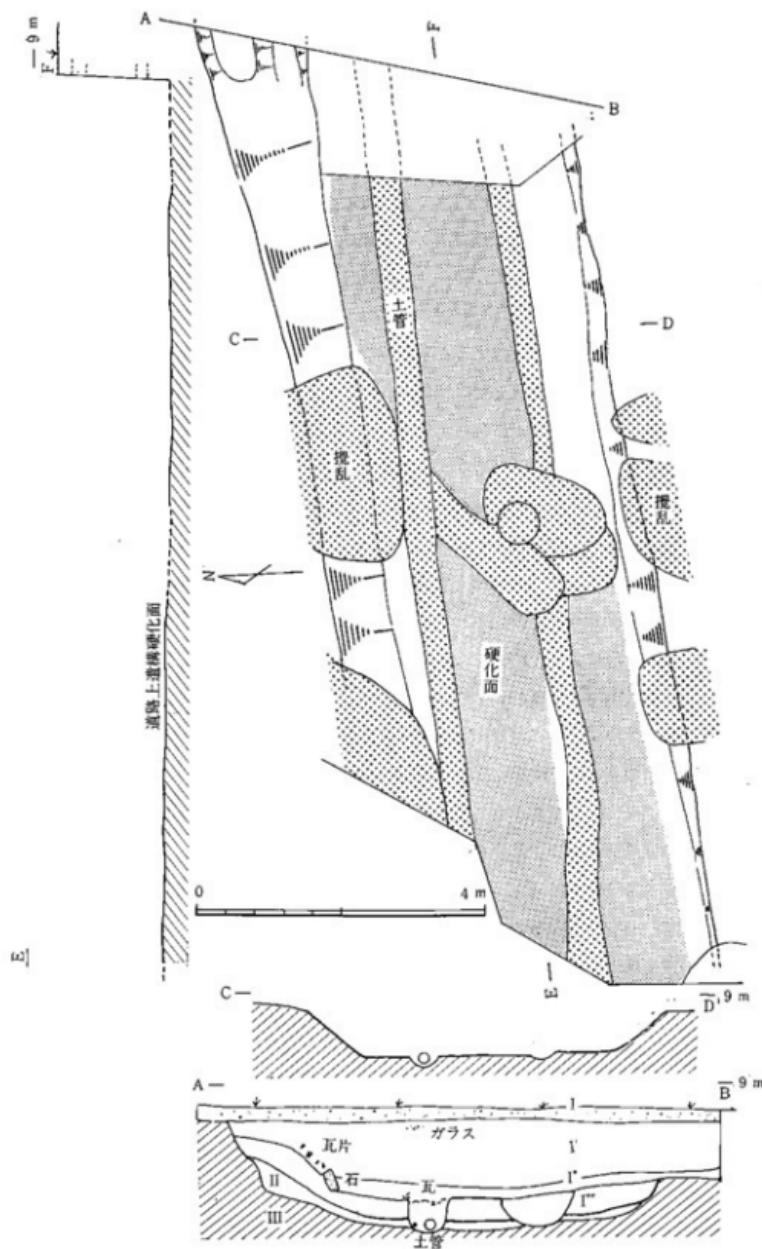
中央トレンチでの土層断面の状況も、北トレンチ同様後世(現代)の擾乱がはげしく、到るところに掘削のあとが観察された。ここでも遺構の検出の可能性については否定的で、この状態だと周辺に遺跡の残っている可能性も難かしくなった。

東トレンチ(第6図) 東トレンチは北及び中央トレンチを遮ぎる形で、東側に南北方向のトレンチを設定した。その延長は約60m、掘削の深度は土層の状態に応じてかえた。このトレンチを設定した場所が敷地の東側で、地表の高低差は殆どなく標高9.8m前後であった。

トレンチでの土層の状態は、數か所に土管の埋設、鉄筋コンクリート等の埋込等のため大きく擾乱されていることが判明された。ここでも擾乱土の下は赤褐色粘質土(地山)があらわれ、遺構出現の期待を裏切ったかにみえた。しかし、トレンチの南端付近の土層断面に溝状の落込

みのあることが明らかになった。ここでも埋没の大部は土管、水道管の埋設その他の擾乱が入っていたが、後刻、道路状遺構検出のきっかけをつくった。

南トレーニング 敷地の南端近くに東西方向のトレーニングを設定し、これを南トレーニングとした。このトレーニングはボーリング場営業当時の埋設物が入り組み、遺跡として見る時甚だ悲観的であった。しかるに、南トレーニング西側付近ではその土層の状態から遺構、遺物包含層があるのではないかと判断し、一帯の表土はぎの後精査を試みた。しかるに、ここでも大きく土層が反転していることが判明し調査を中止した。



第7図 道路状遺構

2. 道路状遺構の調査(第7図)

東トレンチの南端近くに溝状の土層断面があらわれた。その土層断面観察の結果、上面には後世の擾乱が入っているが、下底面は時代も多少は上るところの遺構ではないかと判断し、周辺の調査範囲を西へ拡大して発掘を進めた。その様にして調査を進める中、硬化面があらわれるなどして、もしかして古代の道ではないかと判断したのは後の段階である。本報告書では道路状遺構として処理したい。

土層断面 先づ現地の状況を把握するため東側の土層から第8図により説明したい。

I層は最上層で、上面は現地表に接している。層厚20cm前後、上部にはアスファルト、小砂利、下部には小砂利や黄褐色土が暗黒色土に混入していた。時代の最も新らしい層である。

I'層は溝状の落込みの中の堆積層で、中央部になるほど深く約90cmの層厚となる。この中には焼土、木炭を多量に含み、また局所的にガラス片や瓦等が混入している。土層の色調は黒い。

I''層はI'層の下位に拡がる堆積土で層厚20~25cm、この層から土管や水道管の掘込みがある。埋土中には近世瓦などが投入されていた。また土管等の掘込みの両側には硬化面がある。さらに、I''層の土色は黄色土粒混りの黒土が主体をなしている。

I'''層はI''層の下位に層厚約30cmの堆積をみせている。上層からの二か所に掘込みがあるが、その部位により色調を異にし、中央部では黄色の砂層、褐色土さらに黒色が帯状をなして堆積しているが、南北両側ではI''層に近く、より黒味を帯びてくる。

II層の上面には硬化面が存在する。硬化面は中央部幅2m位の範囲の下底の平坦面である。II層の堆積土には黒色土中に多量の黄褐色土が混じっている。

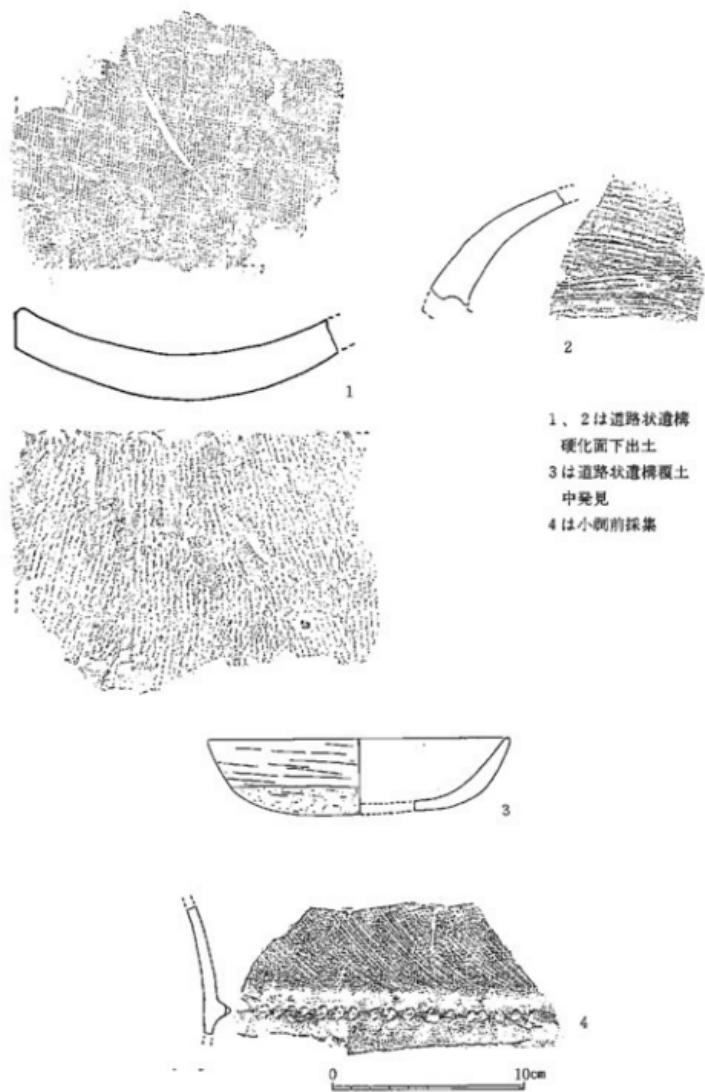
ともかくII層上面は非常に硬く、踏み固められているところから、この遺構は道路遺構ではないかとの判断の一つの依り所となっている。

III層はいわゆる地山で、黄褐色粘質土である。各トレンチで検出された同質の土である。

(1) 道路状遺構(第7図)

道路状遺構は現地表下約1.5mのところで検出されたが、その延長は東西方向へ伸びていた。遺構は凹道となり、両肩を含めて上面の地山のところで4.4mを逆梯形に掘込み、下底面での(硬化面を道路幅と仮定した場合)幅2.2m~2.5mとしていた。硬化面の厚は一定しないが、中央部では10cm下まで達していた。

道路南側で発見されたものに小溝があるが、一時調査の過程で側溝ではないかとも考えたが、検討の結果(東側土層断面参照)、土管等の掘込みと同様後世の掘込みということが確実になっ



第8図 図書館建設地出土遺物

た。

道路状遺構は東トレンチから西へ約12㍍の範囲にわたって検出した。調査地点で後世（現代？）の土層の擾乱がはげしく、西側になるほど鉄筋コンクリートなど基礎構築物があらわれ調査を困難にした。そこで、これ以上西への追及を断念した。調査地点での道路状遺構の延びる方向を東西にとっているが、西側で約5°南へ偏していた。さらに延長方向を直進するものと仮定すれば西側は敷地内の庭園を抜け加勢川に達し、東は現在の道路を超え協和醸酵跡地に達するものと思われる。

(2) 出土遺物（第8図）

道路状遺構の覆土中及び硬化面上、さらに硬化面下から遺物が出土した。覆土或は擾乱土中には、近世瓦、ガラス片、或は陶磁片があったが、それらに混って弥生時代の大型壺棺の口縁部破片、土師器、舶載青磁片があった。第9図3に図示した土師器は復元口径16㌢の丹塗り皿で、内面は磨研され、底部から口縁の立上りのところまで器面の削り手法が用いられている。

硬化面上・下で大きく遺物の種類の違いがない。硬化面上でビニール小袋1ぱい分位の布目瓦の破片と、小量の土師器の破片があった。いづれも小破片があるため図示しなかった。

硬化面下からもビニール大袋3ぱい分位の遺物が出土した。出土の状態はほぼ全域に散乱しており、量的に布目瓦の破片が最も多かった。ついで土師器（高台付焼など）、須恵器、弥生式土器片があった。

硬化面下の遺物は、その殆んどが細片で図示困難なため第9図の二点を取上げた。1は平瓦で青灰色を呈し焼成良好であるが、胎土にひび割れがある。2は須恵器の破片で、壺の頸部から口縁部への移行部である。土器片には頸部接合部の剥離面が観察され、外面に叩打痕がある。

その他の遺物として、この一帯から少量の土器の他、近世陶片が採集されている。そのうち、庭園東側の小祠前で採集した遺物を第9図4に図示した。2の破片は一か所より一括採集したもの的一部であるが、同一個体とみられる他の破片は接合しなかった。この土器は最大胴径57㌢に達す壺で、その最大胴径にあたる部位に突帯があり、その上を斜めの刻目風の文様が押圧施文されている。器形は比較的薄手のつくりで、突帯より上位は笠様の施文具で調整されている。土器の色調は淡黄褐色である。

この第9図4に図示した土器は、その形態から弥生後期初頭に位置づけられる壺形土器で、恐らく壺棺ではないかと考えられる。発見の状況から残りの破片は小祠西側に埋没しているものとみられる。

(3) 道路状遺構について

道路状遺構が期せずして発見された。踏み固められたとみられる硬化面検出、発掘作業の進

行に伴ない硬化面が東西方向に延びていることが判明した。そこで、本稿では道路状遺構として取扱うこととした。この種の遺構の検出例として、熊本市大江町において県立文化センター建設に際し、熊本女子大学跡地を調査した際類似の遺構が発見されている。この方はいく分大規模で、南側に側溝を伴っており、約200mにわたって東西に延びる遺構が検出された。図書館建設地で検出された遺構には、その硬化面上下にわたって遺物が散乱していた。その大部分を占めるのは布目瓦で、しかも細片が多くあった。これらの遺物は、恐らく周囲から流入埋没したものと思われる。仮にそれらの遺物をもとに年代的定め手とした場合、奈良～平安という可能性も出てくる。

この遺構が道路として機能を果していた場合、何故に回道をつくる必要があったか。使用中に年月と共に凹んで来たとも考えられないでもないが、現地の状況を見ると意図が働かいでいるように思える。更に憶測をたくましくすれば現地が傾斜面であるため、坂を緩やかにするこということが配慮されたかも知れない。

最後に道路状遺構の遷移の過程を、東側の土層断面からたとえば、土管、水道管の敷設のための掘込みが現地表下1.3mのところにあることが知れる。そのことは、道路状遺構の落込みの痕跡がかなりの後（現代？）まで残っていたことを示している。

3. 協和醸酵跡地の試掘

県立図書館の建設地（出水二丁目153番地）の東側、道路を距てた上段の協和醸酵跡地が図書館への進入路として予定されている。そこで進入路として予定されている地域を予め試掘し、前以って現地の遺跡の状況を把握することにした。

(1) 調査地点の撰定と各グリッドの発掘（第9図）

協和醸酵跡地の北端を西から東へ向けて試掘地点を撰定した。まず西北部の民家との境では、民家の境界域にそって、4×4四方のグリッドを設定した。そして西より1、2、3………7グリッドとした。また、各グリッドの発掘地点と進入路（表門）との間の2か所を発掘し、西より第一試掘地点及び第二試掘地点とした。この両地点調査範囲はそれぞれ2×2mとした。

各グリットの発掘（第10・11図）

1～7グリッドは1、3、5、7の奇数グリッドを発掘することにした。したがって2、4、6の各グリッドは発掘しなかった。

ここで各グリッドの状況を説明に入る前に、参考までこの地域での土層の模様を説明しておきたい。

I層、即ち表土でどのグリッドでもくろく汚染されていた。層厚5～15cmで、Iグリッドではとくに浅かった。

II層は黄褐色の斑点まじりの火山灰土で、これまでの熊本での調査で遺構を検出したとの報に接していない。各グリッドでは10～20cmで、第1、第2試掘地点では40～50cmとなる。

III層は黒色土で、一般的に縄文後晩期以降の生活層と知られているところである。各グリッドでは10～20cmの層厚が確認されている。

IV層は黄褐色の多少粘り気のある火山灰土でIII層との接点あたりから縄文後、晩期の遺物が出土することも知られている。上位のIII層が黒色火山灰土ということもある、この層の上面でないと弥生や縄文の遺構が検出されにくい。

各グリッドの発掘で、とくに注意をひいたのは上からの擾乱である。それはこの場所が人家の跡ということもあって、土台石の基礎が随所にあった。多くの場合、中に栗石などが入っていた。これもII層、III層と下がるに連れ小さくなり、次第に消滅した。

ここでの発掘は試掘ということであるので、IV層上面の遺構検出で止めることにした。また第1、第2の試掘地点ではIII層の黒土層のあらわれるのをもって発掘を中止した。なお、7グリッドについて、表土はぎの段階で層中に廃石などが埋められ、短期日で試掘の終る目途が立たない状態であったので途中で発掘を中断した。



第9図 協和醸酵跡地グリッド配置図

各グリッドの発掘は、層毎に発掘、遺構、遺物の確認記録の上、下位への発掘を進めた。遺物の出土量の多いところでは、発掘・実測を数回繰返した。

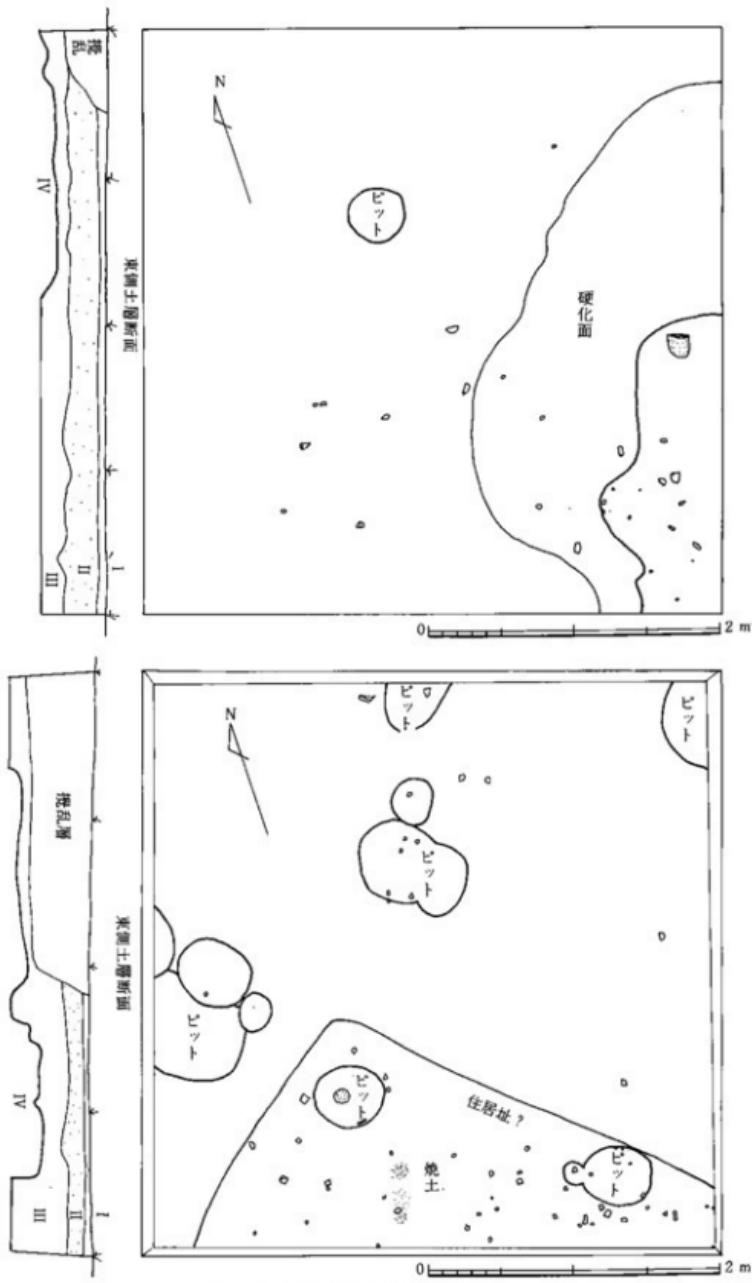
1 グリッド（第10図上） まづ第Ⅰ層表土を取除いた段階で数個の建築物の基礎があらわれる。土台石の基礎で中には栗石が詰っていた。発掘深度が進むにつれ、基礎による掘込も次第に消える。続いてⅡ層を掘上げる。この層中には少量の遺物が混じっていて、この中に布目瓦、須恵器、土師器（高台付塊）の小片数点があった。更にⅢ層の発掘にかかる。この層になると俄然出土する遺物の量がふえ、一回では掘り下げることが困難な状態であった。Ⅲ層中より出土した遺物には弥生式土器と縄文式土器、更に石器（石包丁）があった。弥生式土器には後期の壺片、中期に位置づけられる甕、高杯の破片多数出土した。また縄文土器には曾畠式の土器5～6片あり、更に磨消繩文1点も含まれていた。

3 グリッド（第10図下） 1 グリッドの4倍東が3グリッドで、ここでも1グリッドと平行して発掘した。表土除去したところ東壁ぞいに南北方向に並ぶ根固め石の列が、中央部2か所には柱の根固め石が検出された。

このグリッドでも土師器、須恵器の破片が少量出土したが、Ⅲ層へと発掘深度が進むにつれ出土する遺物の量もふえてきた。更に、注目をひくのは焼土の出現である。グリッドの西北角付近、ついで南壁中央付近からも焼土があらわれた。発掘深度が地表下40cmに達するころには、遺物が南側に集中している状態が観察され、更に発掘を続けたところ住居址のプランとみられるコーナーがあらわれた。

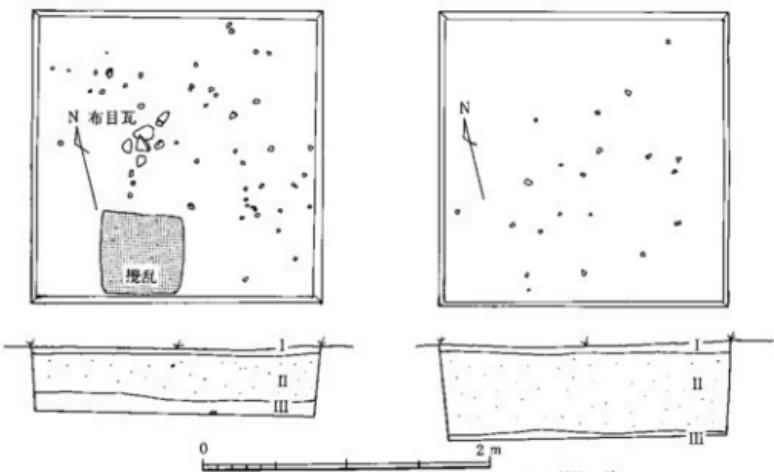
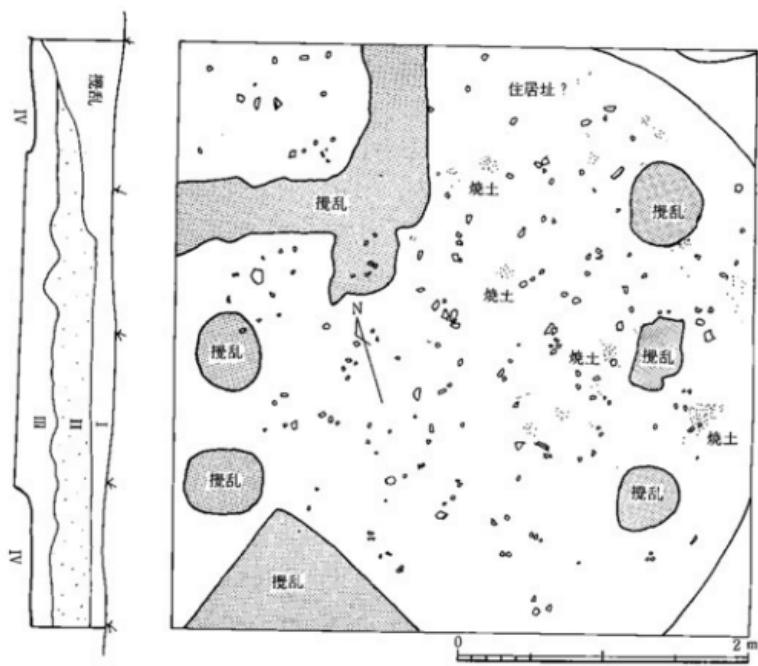


協和醸酵跡地の試掘風景



第10図 協和醸酵跡地試掘

上 I グリッド 下 3 グリッド



第11図 協和醸酵跡地試掘

上 5グリッド
下左 第1試掘地点
下右 第2試掘地点

3グリッド出土の遺物は、大要1グリッドの遺物と変りはない。弥生中期に位置づけられる土器片、器種は壺の他に器台の破片がある。また、発見された縄文土器は曾畠式土器が10点余に上り、また打製石鏃3点、磨り石とみられる平石1、黒曜石片多数があった。

5グリッド（第11図上） 3グリッドの東側に設定した5グリッドでも、表土取除いたあとには擾乱された跡が多数発見された。それはいづれも家屋の土台、基礎構築にかかわるもので、発掘深度が進むにつれ擾乱土は少なくなってしまった。またこれと同時に、下位になる程遺物の出土量もふえ、IV層があらわれる頃には遺物の数も200点近くになった。

地表から約50cmでIV層上面に達するが、その頃になると遺物と共に焼土や木炭片があらわれた。そのあらわれかたは一か所に集中するというより、数か所に点在すると呼ぶがふさわしく、これから経験的に住居址という印象を強く受けた。ついで、東側の両（東北・東南）コーナーには殆んど遺物を含まないIV層があらわれ、遺構の平面プランの一部があらわれた。今次は試掘であるため、これ以上遺構プランの露出は中断したが、遺構の状態から判断して円形プランの整穴住居址が埋没していると見て差支えあるまい。

5グリッドから発見された遺物も多種多様で上位には船載青磁塊の破片、布目瓦片、そして須恵器片、土師片もあった。漸次、III層を掘下げるに及び、弥生式土器を主体とした遺物が多くなり、その殆んどが小片で、第14図上にはその一部を図示した。器種には壺、壺、高杯があり、弥生中期を主体とした遺物であった。

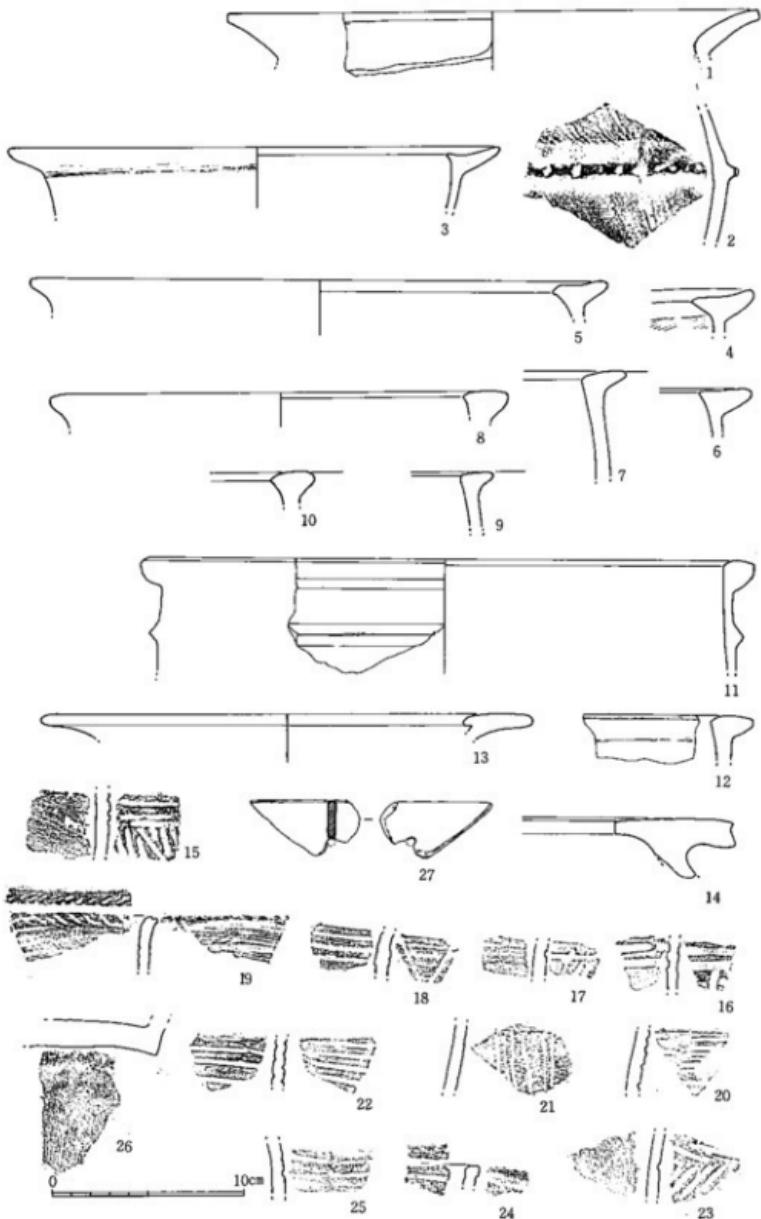
7グリッドは前に述べたとおり、調査期日の関係で途中で発掘を中断した。発掘中、家屋の廃材、捨て石などがあらわれたが、それら擾乱土中にも各期各種の遺物があった。

(2) 第1、第2試掘地点（第11図）

1～7までのグリッド設定とは別に、広くこの地域の遺構・遺物の埋没状態を知るため、正門入口の西側に二地点を発掘地点に選んだ。即ち、第1、第2の試掘地点であるが、ここでの状況を説明したい。

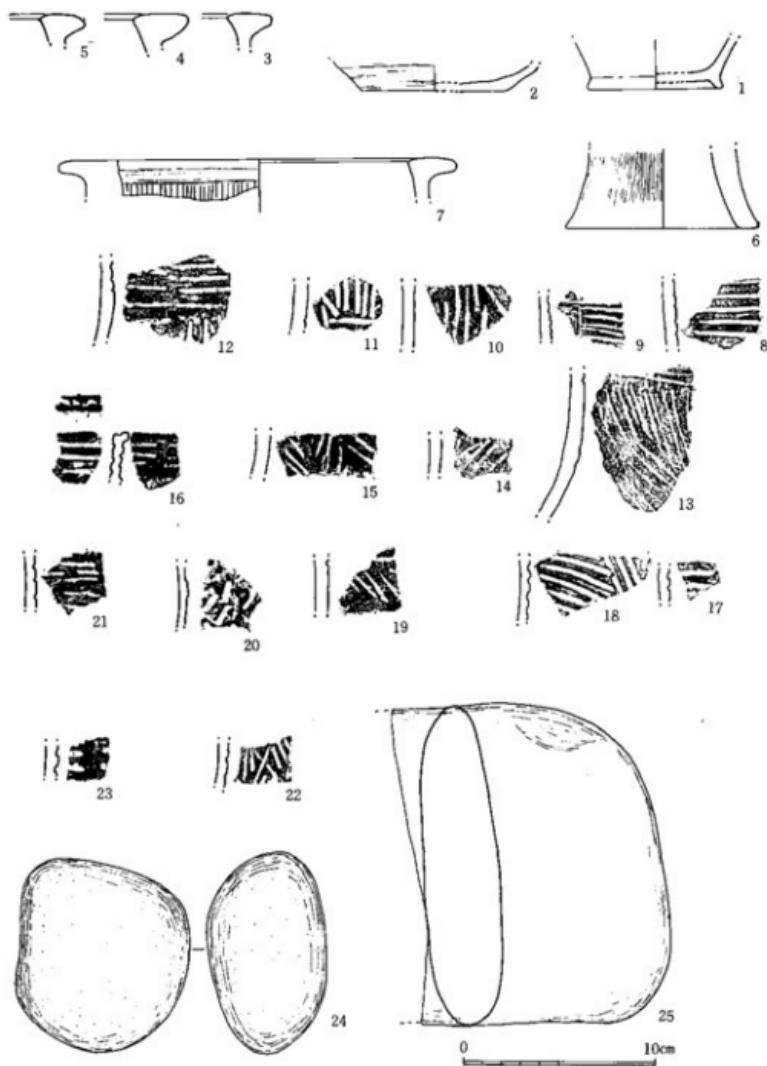
第1試掘地点での表土約10cm、II層は25～35cmで東側がいく分厚い。II層下面からIII層上面にかけて遺物があらわれ、中央付近に布目瓦（第14図下）の破片が一かたまりになって出土した。その他須恵や土師の小片、中には船載青磁、弥生式土器片も少量出土した。ここでは黒土層（III層）の確認に止めたが、発掘が進むにつれ弥生式土器など埋没しているものと考えられる。

第2試掘地点は第1試掘地点の東15mのところに設定したが、そこではII層が層厚55cmに達する深さであった。ここでも遺物の出土状態は第1試掘地点に似ていて、各種の土器片が多数発見された。

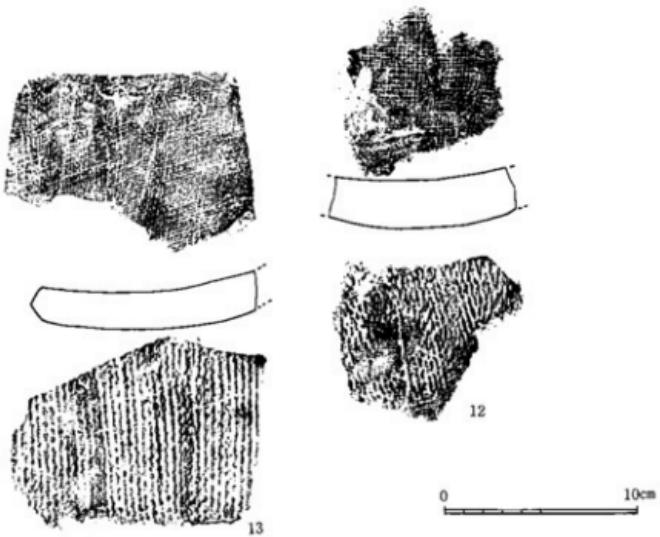
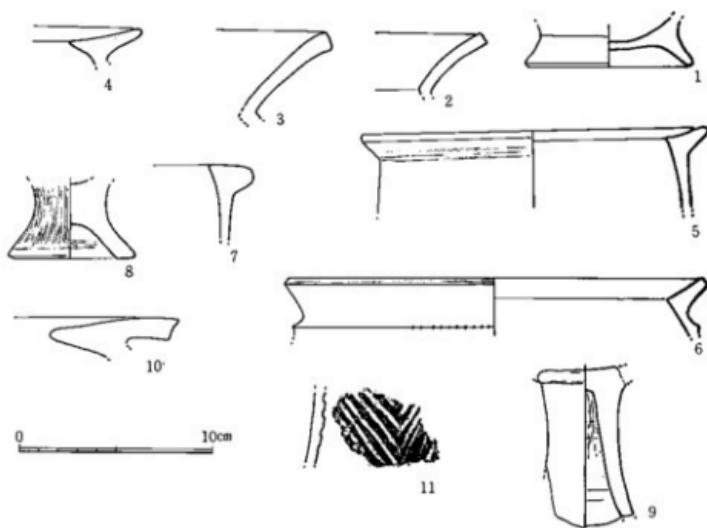


第12図 1 グリッド出土遺物

1～14弥生土器 15～26縄文土器 27石包丁



第13図 3 グリッド出土遺物 1 土師器 2 須恵器 3～7 弥生土器 8～23縄文土器 24、25石器



第14図 5グリッド及び第1試掘地点出土遺物 上5グリッド 1土器器 2~10弥生土器 11縄文土器
下第1試掘地点12・13布目瓦

第Ⅳ章 神水遺跡調査のまとめ

県立図書館建設に伴い神水遺跡の一部を調査することが出来た。発掘調査の結果、図書館敷地の主要部分は、いく度となく建設、破壊が繰り返され土層が大きく搅乱されていた。その際上土は大きく削り去られ、遺物包含層そのものは痕跡すら止めていなかった。そのことは、協和醸酵跡地の試掘の結果と照らし合すればより明瞭になる。

図書館建設地と遺跡を距てた東側の協和醸酵跡地とでは、比高差約2倍向う側が高い。1グリッドの土層層序は部分的に搅乱を受けているものの、I・II・III・IV層と順序よく各土層が観察される。そのことを元に考えれば、元々協和醸酵の敷地を起点にして、一定の傾斜を保ちながら地形が加勢川べりへ漸傾していたものが、人為的カットにより約2倍比高差となったものとみることが出来る。

その様な状況で、最初に着手した試掘の結果は遺跡として甚だ悲観的だった。しかし、幸い東トレーニング南端付近に「道路状遺構」を検出し、多少なりとも遺構の状態を明らかにすることが出来た。

ついで、協和醸酵跡の試掘をする。1・3・5の各グリッド及び進入路にあたる正門との間の二地点を発掘する。ここでの調査結果は、部分的に上からの搅乱があるものの遺構の残りは良好で、とくに3、5グリッドでは弥生時代の住居址の一部とみられるものが検出された。従って、この一帯には弥生時代の住居址群が埋没しているものとみられる。また意外なことに、3グリッドでは縄文前期と見られる曾根式土器の破片が多数発見された。調査により縄文期の遺構検出も期待される。

布目瓦、高台付塊、或は須恵器などの歴史時代の遺物が全試掘地点で発見されている。これがどういう意味あいのものか今のところ明らかでない。いづれ、この地域の調査をすることとなればかなりの成果が期待出来る。

この協和醸酵跡の試掘の際、周囲住民からの聞き込みがあったので付記しておく。一つは協和醸酵元従業員の一人からの話で、養魚池を造るために地下げ中、中から斎棺が出てきたということで、その正確な地点を教えてもらった。ここは将来熊本市立体育館建設予定地となっている。他の一つは、正門北側の屋敷跡（出水二丁目6番地）の一角に祠が奉祀されている。ここは元々米屋さんだったらしく、地下げ中に斎棺が発見されたとのことであった。

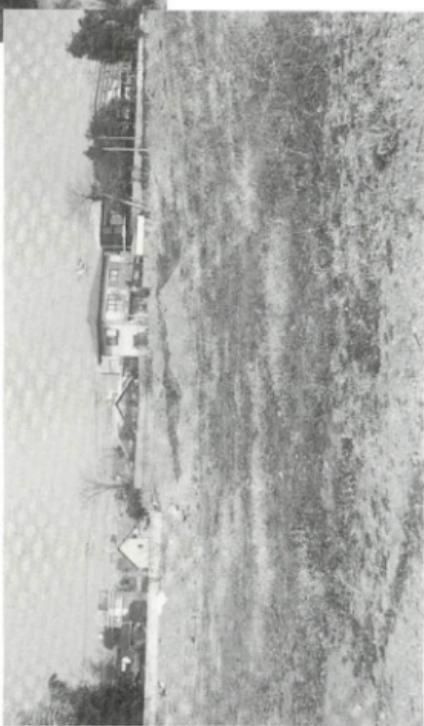
図 版



西から



北から



南から



庭園（東から）



東北から

図書館建設予定地の景観 2

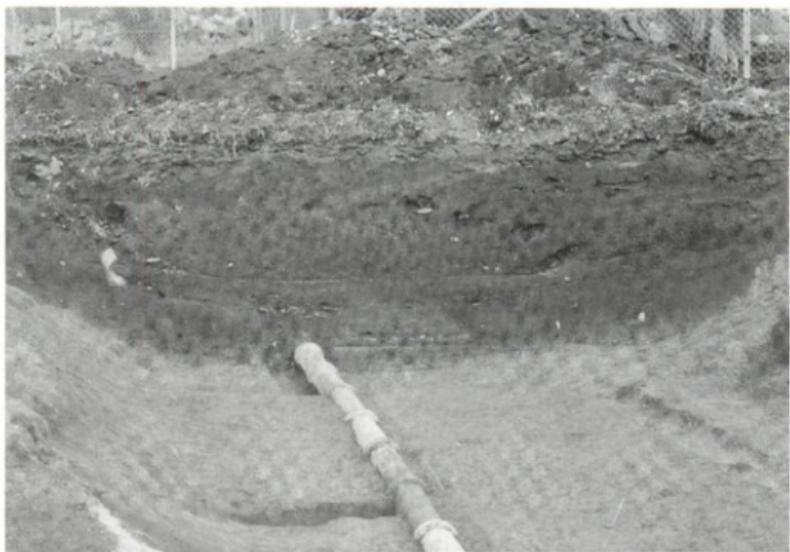


中央トレンチ（西から）



東トレンチ東南部（南西から）

図書館建設予定地の試掘



道路状造構土層断面

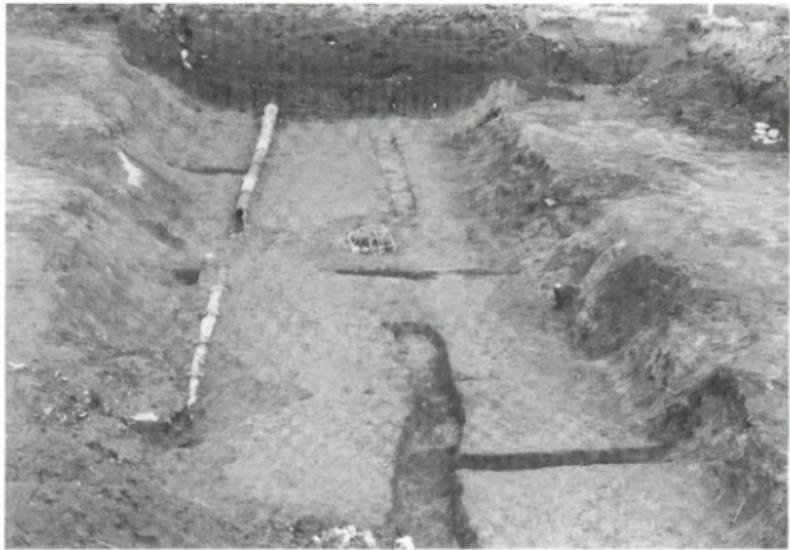


硬化面露出（東から）

道路状造構 1



硬化面取除き後（西から）



硬化面の露出（西から）

道路状遺構2



東から（手前から 5、3、1 グリッド）



東から（手前が 3 グリッド）

協和醸酵跡地試掘 1



西から（手前から1、3、5グリッド）



西から（手前から1、3、5グリッド）

協和醸酵跡地試掘 2



西から（手前第1試掘地点）



北から（第1試掘地点）

協和醸酵跡地 試掘 3

神水遺跡

熊本県文化財調査報告 第69集

昭和59年3月20日印刷

昭和59年3月30日発行

編集発行 熊本県教育委員会◎
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 コロニ一印刷
〒860 熊本市二本木3丁目12-37

神水遺跡正誤表

頁	行	誤	正
7	12	×溝状遺構	○溝状遺構
8	2	×拳大	○拳大
8	3	地表45センチ	地表下○45センチ
8	20	×3日18日	○3月18日
16	9	第×8図	第○7図
16	23	道路遺構	○道路状遺構
16	30	×××××としていた。硬化面の厚は	○○○○であった。硬化面の厚さは○
18	12.19 23.28	第×9図	第○8図

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第69集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：神水遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日